

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「イチゴがよんで アメがなく」

弥生三月は、雛の節句です。のめしこきのわたくしは、「お雛様を出さないで泣く」という迷信をいまだに信じているために、年度末の多忙な時期というのに重い腰をあげて、15人のお人形と金屏風はじめ、関連するさまざまな小道具・大道具や牛車の牛や御膳を部屋中おぼらにして、飾ります。

もし、15人出さなかったらどうなるか？部屋の天袋てんぶくろの箱の中で、樟脳しょうのうを抱いて眠っているお雛様一族が、しくしく泣いている様子が頭から離れずに、そわそわどきどき、さてどうしょぼ、どうしょぼと仕事も食事も手に付かないで春を過ごすことになると思います。

お雛様に泣かれるのも困りますが、新潟県人にとって、ちいとばか（いっぺここの意味で婉曲的新潟表現）困るのは、アメがなく（泣くと表記か？）ということです。三月春といえど、新潟はまだまだ寒くて、湿度も高め。そんな折、どれ、アメでも口にしよう、と思ったら、「あきや！ないてしもた！」というように使用します。

意外なことに、先に書いた「天袋」も「樟脳」もピンとこない世代も、「アメがないた」と平気で口にするくらい県内の主に中越・下越地方の一部ではポピュラーな言葉です。

あくまでも筆者の調査なのですが、上越・佐渡地方ではあまり一般的ではないようです。みなさんの地域ではいかがでしょうか？多様な方言があり、地域差も大きい県内ですから、地域によって、使用する・しないが顕著なことばかも知れません。

とはいえ、共通語で「アメが溶けた」と表現するよりも、「アメがないた」のほうが、アメの表面が

ぺたぺたしているさまが伝わってくるような気がします。さらにこのぺたぺた具合が進むと「アメがないて、べったべたした」と表現するようになります。事実、上越出身のある人は、「アメがないた？初めて耳にしたけど、なんとなくその言葉の感じは伝わってくる」といいますから、その状態を見事に表した方言ならではの表現かと思います。

さらに、ここでおもしろいのは、共通語の「溶ける」と「なく」とは微妙に温度差？があるということです。「溶ける」と表現するときは、固形物の形がなくなってしまうほど変形した状態、「なく」の場合は、固形物の表面が溶けるが、まだ形は保っている状態をいい、暗黙のうちに両者を使い分けているようです。旧西蒲原地域の人からは、「昔、塩が湿気て汗をかくようになることを、塩がないたと言いました」と重要な情報を得ました。かつては今よりはるかに貴重品であった塩や砂糖やアメが湿気ては、それこそ泣きたくなるように大変ショックな出来事であったと思います。

そういえば、春を告げる「越後のイチゴ」が真っ赤に熟すことを「イチゴがよんでいる」（熟む、で古語イヨムから）と新潟では表現しますが、色付いたイチゴが手招きして「食べてね」、と誘っているような表現です。アメがないて、イチゴがよんでエチゴに春到来！アメもイチゴも擬人化表現（？）するエチゴ人のココロが伝わって、またひとつふるさとのことばの温かさを発見しました。

